

若者達の「純粹パワー」は沖縄の宝

株式会社メディアール代表取締役 ● サファイア玲子



沖

縄に来て早や五年。きっかけは今年二十歳になる息子の不登校。ひきこもりだったので、海に憧れ移り住む都会人とはスタートの訳が違った。もしも失敗したら、と車一台に布団・衣類等必要最小限を詰め込み、友人一家の住む与那原町に上陸。程なく迎えた初登校日、彼は六人もの級友を自宅に連れ帰った。それまで親子で社会から遮断され孤独と闘ってきただけに、級友に囲まれ嬉しそうに笑う息子の姿に私は、寝室で声を上げて泣いた。この日と一年後の中学卒業式での光景は、私の生涯で決して忘れることはないだろう。

息子の復学と共に専門学校で再開したブライダルやコミュニケーションマナー講師のお仕事。学園生活では、生徒達の純粹な心根に圧倒される毎日だった。携帯電話に大学進学、免許取得や車購入等々、親の援助は当然の役割だと思っていた私に生徒達は言う。「姉チャンが宮古から内地の大学行ってるから、俺は自衛隊入って給料貰いながら航空整備士になるんだ。五人

姉弟だしな。」と航空大学校進学を諦め家計を助けながら将来を見据える男子。「お父と二人暮らしだけど、私の作るお弁当毎日楽しみにしてくれてるよ。私がいなくてダメみたい。」とアルバイト代を食費の足しにする父子家庭の女子。屈託のない満面の笑みで日常の出来事を話してくれる彼らに、完全にノックアウトされてしまった私。

その後担当するラジオ番組に、告知のためゲスト出演されていた県産業振興公社職員より「第一回ベンチャービジネスサポート事業」公募への挑戦を勧められ、教え子達のような学ぶ意欲の高い若者に更なる可能性が提供できれば、と寺子屋的私塾を開くべく応募したところ、全国応募総数約一一五社の中から幸運にも十五件という県の支援事業に採択頂いた。開校したスクールには、期せずして四十五名の生徒が入学。お陰様で万国津梁館を始めとする優良企業への就職に恵まれた卒業生も誕生した。

そんなある日、大学の客員講師としてベンチャーで起業した想いを熱く語る機会があった。後日送付された講義レポートの中には「先生、僕達以上に沖縄を愛してくれてありがとう。僕も将来この島の役に立てる様になりたいとずっと心で願ってきたけど今後は先生みたくに口に出して想いを形にするよ。」また、客室乗務員への夢を諦めきれず、母子家庭ながら猛勉強の末外資系企業に採用され、国際線で乗務した経験を話すと「在学中に妊娠し今年

で大学やめるつもりでしたが、今日先生の話を聞いてやめるのをやめます。子育てが一段落したら、復学して必ず卒業します。先生ありがとう。」この子達の純粹パワー、半端じゃない。

実は「大学生」に憧れていた私は、三十歳を機に通信教育で短大に入学し、ハードな実習生活の末、卒業と同時に保母と幼稚園教諭の資格も取得。「どうせやるならとことんやれ」これは亡父の教えだった。ふり返ると競争率四十五倍だった宝塚受験、百倍近かったフジTVリポーター、そして応募者千名のうち一名採用だった客室乗務員の面接と、常に不可能に挑戦し続けてきた。何が私を突き動かすのかは解らない。しかし声を大にして私は言いたい。「人はいつからでもどんな形でも始められる」と。大阪人にはダメで元々、叶ったラッキー的発想がある。だからお節な私は、やる前から諦めてしまう人をほっとけない！四年前、教え子が伊丹空港からJ系航空会社CA試験の最中電話してきた。「先生もうダメです。これから二次試験。全員ジャージ姿なんだけど全国から集まった受験生皆カッコイイ。私なんか絶対無理。」咄嗟に私は電話口で叫んだ。「アンタはミス那覇、とびつきの美人や。今すぐ鏡に全身映して自分の美貌に自信持つて挑みなさい。」彼女、怯んだマインドは立て直せなかったものの、その直後全日空に見事合格し今春から晴れて国際線客室乗務員に昇格した自慢の教え子だ。

可能性があるのに挑戦しないのはもったいないと考えてしまう私は、そんな性格と過去の実績から、広報・プレスリリース配信代行業を新たにスタートさせた。ビジネスの原石は県内に溢れているから、思いきり磨きをかけ、積極的なPRでメディアとの橋渡しとなり全国に向けて輝きを発信し、地域経済の活性化にも貢献したい。折しも、沖縄県より「グッジョブ運動・地域推進リーダー」の職を拝命した。自らの出演番組や講演活動を通して、社会へ巣立つてゆく若者が働く場に恵まれ経験を重ねる中で人生の目標や自信、生きがいをつけてゆく、その一灯の役割を微力ながら果たしたい。

奇しくもこの原稿を執筆中、神戸から来沖した旧友に誘われるまま恩納の海に潜って驚かされた。一九八六年夏、ダイバー免許取得のため初めてこの島に訪れ毎日身近に感じていた海。色とりどりの魚の群れや珊瑚礁、きらめく水の美しい光景が当時と何ひとつ変わることもなく私の目の前に飛び込んできたのだ。多忙を極める日常の中でふと優しい気持ちになれた瞬間、海水と涙の塩が入り混じっていた。その昔、なにかや嫁になる覚悟をも抱かせた海の仲間と過ごした沖縄、青春時代の映像が走馬灯の様によみがえる。そして私は今、めぐりめぐってこの地で生かされている。これから先、未知なる挑戦に自らを鼓舞させながら、人生の折り返し地点を私なりに歩んでいこうと、心新たに決意する。